



Katsuhiko TAKIZAWA

Makoto KAGABU

Makiko NARITA

Yukio MAEHARA

Yuichiro SHIBATA

特集

この先生に 教わりたい!

Vol.
2



大学には、知的好奇心を刺激してくれる教員との出会いがあります。
 学びの道案内人である先生方は、
 時として皆さんのその後の人生を大きく変える存在でもあります。
 昨年の55号に続き、先生方を紹介する特集の第2弾。
 今回は30代~40代の若手教員を各学部から1人ずつクローズアップしました。
 それぞれの専門分野で研究を深めながら、
 新しい感性で教育に情熱を注ぐ先生方の魅力と奮闘ぶりをご紹介します。

PROFESSORS OF
NAGASAKI UNIVERSITY



Naoko FUJII

Naoya KISHIKAWA

Jun KOYAMATSU

Yoshiko KONDO

Souichi YANAMOTO

囲

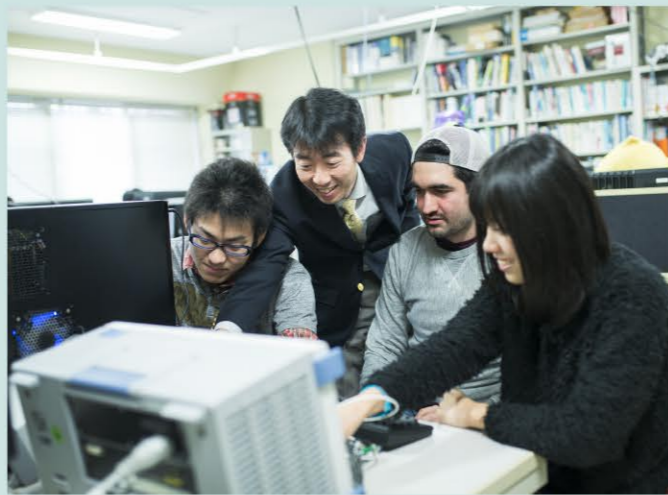
碁や将棋のできる人工知能(AI)が最近話題ですが、同じような対局型ゲームの世界コンピュータインテリジェンスで準優勝したチームが長崎大学にあります。工学研究科の柴田裕一郎准教授と学生から成る「チームさくら」です。

「ゲームの種類は毎回変わっていくのですが、各チームが作ったコンピュータ同士が一手一秒で対戦するコンテストです。アイデアを主観的に審査されるものと違い、完全に勝ち負けで勝負が決まるのが爽快ですね。盤面をパッと見たとき、画像処理でどのあたりがポイントになりそうか。戦略、手法、技術、動作テストも大切です。学生は得意分野を分担しながら総合力を結集します。米国のIBM研究所に勝ったときは大変盛り上がりました。学生もみるみる積極的になり、教育効果も実感しました」。

「そもそも先生の専門はコンピュータのしくみの研究。つまりコンピュータを「作る」ことです。

「コンピュータとは目的のない道具。ハードウェアという固い構造があつて、その上のソフトウェアを取り替えることでいろいろなことが可能になります。しかしハードウェアそのものの構成を、例えば計算用、画像認識用など使い道に即して替えられればもつと効率が上がります。昔は回路を設計して部品を組み合わせて作りましたが、今はプログラ

コンピュータを通してモノづくりの面白さを味わう



それぞれ自作したコンピュータを見せ合う柴田研究室の学生たち。



コンピュータゲームの世界デザインコンペ「HEART2015」では「Blokus Duo」という対戦ゲームで世界第2位になった他、数多くの入賞実績を誇ります。

自作のコンピュータで戦う対局型ゲームの世界大会で2位になりました。



ミンク言語で設計した回路をそのまま具現化できる特殊な半導体のチップがあります。三年次ではそのチップを使ったコンピュータを一人一台作りますよ」。

そのかたわら、二カ月に一度は海外出張を精力的にこなします。

「ケニアでは大学のロボットコンテストの審査を何年もやっています。またミャンマーではJICAのプロジェクトで現地の大学の工学教育支援を行っています。途上国の若者は貪欲でエネルギーシユ。紆余曲折を飛び越えて一番効率の良い方法を学べる一方で、基礎が弱い。日本は基礎教育がしっかりしています。お互い鏡のようなもので、行き来することで良い面と悪い面が見えてきます。海外での経験を日本の教育にも生かしていきたいです」。

学生たちには、モノづくりの本当の面白さを味わってほしいと語る柴田先生。ご自身の研究論文をまとめるときと同様、コンピュータを作るときも楽しくて夢中になれるのだそうです。

工学研究科 電気・情報科学部門
柴田裕一郎 准教授

慶應義塾大学大学院理工学研究科計算機科学専攻後期博士課程修了。博士(工学)。2001年長崎大学に着任。2008年より現職。

講義 論理回路(工2年)／コンピュータアーキテクチャ(工2年、4年)／コンピュータ構成論(工3年)／情報工学実験(工2年、3年)

Yuichiro SHIBATA

PROFESSORS OF NAGASAKI UNIVERSITY

ワ

「ワーキングメモリ」という言葉をこ存じですか？ 脳の認知能力の一種で、教育学部で教育心理学を教える前原由喜夫准教授の専門分野です。「重要なことを覚えておいて、必要に応じてその記憶を引っ張り出して使うワーキングメモリは、文章読解や計算、推理推論など、人間のさまざまな思考能力に関連することを知り、興味を持ちました。中でも相手の心を推測する能力との関連を研究しています。相手の気持ちを推し量るときも、脳内に記憶されたいろいろな情報を探し出して「相手は今このように思っているのだろう」と推測する必要があります。ワーキングメモリがダウンしていると人の気持ちも推測できなくなるのです」。

長崎大学に赴任してからは、特にその成果を教育現場に生かすべく、附属小中学校を中心に質問紙調査や心理学実験を主に行っています。

「心掛けているのは、現場の先生の困惑や迷いを少しでも払拭し、教育に応用できる研究ですね。例えば、膨大な量の脳トレ教材は本当に効果があるのか。親切な行為を記録すると自己効力感が増すというのは本当か。また最近話題のクリティカルシンキング(批判的思考力)の客観テストの開発など。心理学の知見は科学的なものなので、きちんとした数字的な裏付けがあります。データを提示して効果の有無を検証で

教師にこそ必要な教育心理学



先生の研究室で調査の打ち合わせをする学生たち。



子どもを対象とした調査の際に、緊張や警戒心を和らげる奥の手がこの「飛び出す絵本」。子どもに壊されることもあります。効果は抜群です。

心理学の知見を教育に生かすことで、教師の迷いは払拭できます。



「ただ、現実には教員採用試験の暗記科目として詰め込んで、すぐ忘れてしまう人も多いですね。ある公立の小中学校で私がデータ収集の相談をもちかけたら「子どもはデータじゃない、教育には情熱があれば十分だ！」と叱られたこともあり。しかしデータから見えてくる子どもたちの本当の姿というものが必要あります。そもそも教育への情熱はあつて当たり前でしょう。学生たちには、それに加えて、日進月歩の心理学を学びながら科学的な知見を教育に生かせる教師になってほしいですね」。

そう力強く語る前原先生。一方で、前原研究室のブログには日常生活での気づきがユーモラスな文章でつづられ、先生の違う一面がのぞけます。人の心は奥が深い！

教育学部
前原由喜夫 准教授

京都大学教育学部卒業。京都大学大学院教育学研究科博士後期課程修了。博士(教育学)。日本学術振興会特別研究員、科学技術振興機構研究員を経て、2014年長崎大学へ着任、現職。

講義 発達心理学(教育3年)／道徳教育論(教育3年)／教職実践演習(教育4年)他

Yukio MAEHARA

PROFESSORS OF NAGASAKI UNIVERSITY

学

術界の芥川賞ともいわれるサン
トリー学芸賞。多文化社会学
部の滝澤克彦准教授は、著書『越境す
る宗教 モンゴルの福音派』で二〇一五
年の同賞を受賞しました。

「著書では、モンゴル国における福音派
キリスト教の流行という一見マイナー
な現象を通して、今日のグローバル化す
る世界の特徴を描き出そうとしまし
た。こんな小さな書を認めていただき
研究の励みになります」。

なぜキリスト教が広まってきたのか。
そこに興味を持った先生は、十五年以上
モンゴルに通い、対象者の生活に寄り添
いながら聞き取りを重ねたそうです。
「現地の言葉に精通し、信頼関係を築
いていくのは調査の基本です。人々の日
常のなげない一言から読み解ける問
題もあります」。

このようなフィールドワークの手法は
多文化社会学部で学ぶものの一つ。滝
澤先生の担当は「宗教文化論」ですが、
学部教育の他、全学向けの教養教育科
目でも「宗教学」を教えています。

「よく日本人は宗教に無自覚だといわ
れます。しかしこれは、世界的に見ると
極めて特殊なこと。グローバルにもを
考えるためには、宗教についての見識が
不可欠です。講義では、ダーウインの進
化論を否定する人々が現代の米国で多
いことなども取り上げます」。

日本の小中高校では宗教について学

「宗教」からグローバル化を考える



宗教学のゼミの一環として「死者の記録」をたどる先生と学生たち。原子爆弾無縁死
者追悼祈念堂を経て国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館へ。一人一人の顔を映し
出す追悼の手法や日本人の死生観について、学生と語り合っていました。



滝澤先生の著書『越境
する宗教 モンゴルの福
音派』（新泉社）。ある地
域に新しい宗教が入って
いくとはどういふことか。宣
教師、聖書の翻訳、教会、
そして信仰と民族主義。
さまざまな角度から読み
解いていく力作です。

グローバルにもものを
考えるためには、宗
教についての見識
が不可欠です。



「高校までの学習に慣れた学生は、と
にかく早く『答え』を求めたがりませ
ん。しかし、今世界で起きている対立や紛
争の多くは、正否や善悪について短絡的
に答えを出してしまうところから生ま
れています。一方で、宗教学は自己批判
の繰り返し。『答え』ではなく『問い』を
深めることで開ける視野があります」。

東日本大震災後、被災した集落の祭
礼行事の復活過程を記録したことも
ありました。その際現地に入っているポ
ランテアから「何の役に立つの？」と投
げかけられた言葉に困惑した、とも。

「ノーベル賞を受賞した大隅良典博士
の『役に立つ』という言葉が社会をタメに
する」という言葉にとても共感しまし
た。役に立つかどうかという短絡的な
価値判断の先にある、一見役に立ちそ
うもない地平に研究や学問の本当の価
値があると思います」。

多文化社会学部
滝澤克彦 准教授

東北大学大学院文学研
究科博士課程修了。東
北大学大学院文学研究
科助教を経て2014年長
崎大学に着任。現職。

講義 人間観とコスモロジー(多文化2年) / 宗教文化論(多文化3年) /
宗教から見た日本(教養教育) / 宗教学(教養教育)他

Katsuhiko TAKIZAWA

PROFESSORS OF
NAGASAKI UNIVERSITY



口

腔がん、インプラント(人工歯
根)、睡眠時無呼吸症候群――。

口腔外科専門医の柳本惣市講師が関
わっている三本の柱です。一見別物のよ
うですが、そうではありませんでした。
「メインとしている口腔がんは希少が
んの一種で、研究が進みにくいのが実
情です。そこでエビデンスに基づいた治
療法を確立させるため、多施設共同臨
床研究を行っています。同時に私自身、
診療のガイドライン作成や規約改定の
ための仕事にも携わっています。また近
年、口腔がんで顎の骨を削った患者さん
には保険適応でインプラント治療が可
能になったことから、インプラントの研
究も行っています。睡眠時無呼吸症候
群は通常は内科で診療されることが多
いのですが、長崎大学病院では私が認
定医の資格を持っているので症例によっ
ては口腔外科でも診ています。実は五
年前、いびき防止のためのマウスピース
型口腔内装置を開発して特許を取得
しました。装着時の違和感も少ないこ
とから、軽症の患者さんにこの装置を
用いて治療しています」。

これらの研究や診療と並行しながら
学生の講義や実習のアドバイザーをこな
す柳本先生。まさに、歯学部が目指す
「多様なニーズに対応できる歯科医師」
を地で行くような毎日です。
「今、求められているキーワードは医科
と歯科の連携です。実際、長崎大学病

広がりつつある歯科医の職域



口腔外科の治療は、抜歯や歯茎の切開などもあります。学生には、常に糸結びや器具
の使い方をトレーニングするよう指導しています。



睡眠時無呼吸患者のために先生が開発したいび
き防止口腔内装置。上
下の顎部分に渡したベ
ルトがフレキシブルに伸
びるため顎を動かしや
すく、着け心地が良い
のだそうです。すでに安
価で商品化されています。

医師と連携し、多
様なニーズに対応
できる次世代の歯
科医師を育成します。



院は現場レベルで進んでいる
ので、学生の学びも大きいと
思いますよ。例えば「周術期
口腔機能管理」。呼吸器・消化器のがん
の手術や心臓血管手術、抗がん剤治療
の患者さんの合併症軽減のために、事
前に口腔ケアを行うものです。全国的
に注目されていますが、長崎大学病院
の達成率は全国でもトップクラスです。
また、講義も病態別に疾患を出し、そ
れに関連する診療科が教える統合科
目があります。疾患によっては内科や
精神科の医師が教えることもありま
す。我々教員が病態を想定してシナリ
オを書き、それを受けた学生がグルー
プで討議するもので、離島実習と合わ
せて長崎大学の特徴の一つです」。

口腔外科一つとってもその領域は多様
化している中、医師と連携するために医
学的知識も学ばなければならず、まさ
に盛りだくさん。しかし身近に柳本先
生というロールモデルが存在することで、
イメージしやすいのではないしょうか。

大学病院 有病者歯科治療部
柳本惣市 講師

長崎大学歯学部歯学科卒業。博士
(歯学)。長崎大学歯学部附属病院第
一口腔外科研修医、医員、助手を経て、
2006年長崎大学病院口腔外科講師
に着任。2014年より現職。

講義 口腔外科学I(歯4年) / 口腔外科学I実習(歯4年) / 臨床解剖学(歯5年) /
統合科目:口腔腫瘍学(歯5年) / 統合科目:睡眠障害と疾患(歯5年)

Souichi YANAMOTO

PROFESSORS OF
NAGASAKI UNIVERSITY



「巻」 岐、対馬、五島の医療福祉関係者で彼の名前を知らない人はいない」とまでいわれているのが離島医療研究所の小屋松淳助教です。

「それはオーバーですが、離島実習のコーディネートを担って五年目です。さすがに方々で顔を覚えてもらえましたね。」

長崎大学の医学部、歯学部、薬学部には、全国でも珍しい離島実習のカリキュラムがあります。近年、全国的に地域医療教育の必要性が叫ばれています。長大の離島実習は今年で十三年目になりました。

「学部によってニーズが違います。例えば医学部医学科の場合、地域中核病院、診療所、保健医療行政、福祉施設での実習をバランス良く盛り込みたい。その受け入れ交渉は、実際に現場に足を運んで進めます。皆さん気持ちよく協力くださるのでありがたいですね。受け入れを継続していただくために学生には緊張感を持って実習するよう言い、トラブルには神経を使います。幸い、医療や福祉に携わる方々は人を見捨てるよりは救いたいという方ばかり。再発防止のための改善を行いながら関係性を長年積み上げてきました。」

先生はコーディネートの業務の他、研究所のある五島中央病院での診療もこなします。また、五島市の処方箋情報の一括管理に関する医療情報共有化研究も行っています。

離島実習で地域医療を学ぶ



五島市で行われている住民健診は大学の疫学研究も兼ねており、各学部の学生が実習で参加。現場での動き方や高齢者への接し方など小屋松先生が温かく見守っています。



学生が中心となって五島市で行った医療と福祉のセミナーの発表も統括責任者としてアドバイス。「低学年のうちから自発的に島での研修を体験する学生も増えたので頼もしいですね。」

高齢化社会での医療と福祉の連携など、島だからこそ学べることがあります。



「いわば『お薬手帳』の電子化ですが、莫大な医療情報をどう分析して次のアクションにつなげるか。その評価も大学の役割の一つであると考えています。研究の過程でさまざまな関係者との出会いが生まれ、新たな実習先が開拓されるというフィードバックもあります。」

離島を舞台に大学が展開する実習、診療、研究の輪。その中で、高齢化問題や、治療後の生活まで視野に入れた医療と福祉の多職種連携など、島では多くの学びがあります。

「特に、地域の人たちが抱えている期待や医療関係者の情熱を肌で感じてほしい。これは学内の座学だけでは分かりません。中には、離島実習の経験を経て島の病院を選ぶ研修医も現れてきました。うれしいですね。しかし、それに限らず地元や海外でも島での体験を役立ててほしいのです。」

地域の現場での貴重な体験は、プロの「たまご」たちの血肉となっています。

医歯薬学総合研究科
離島・へき地医療学講座 離島医療研究所
小屋松 淳 助教

長崎大学医学部医学科卒業、
長崎県五島中央病院初期臨床研修医を経て、長崎大学病院および長崎医療センター小児科勤務。2013年より現職。

講義 医と社会I(医学科1年、保健学科1年) / 地域医療ゼミ「しまで学ぶ地域医療」(医学科1年) / 臨床実習(離島医療・総合診療・保健実習)(医学科4・5年、保健学科4年、歯5・6年、医6年)他

Jun KOYAMATSU

PROFESSORS OF
NAGASAKI UNIVERSITY



イ ンド洋、太平洋、水が溶ければベーリング海峡を通って北極海へ。水産学部の近藤能子助教は、今もたびたび国内外の研究船に乗って世界の海に繰り出しています。長崎大学に着任する前は国立極地研究所の研究員でした。専門は海洋化学。船の上で何を調べるのでしょうか。

「海水中の鉄などの微量金属元素と生物生産の関係について調べています。海の中の食物連鎖の出発点は植物プランクトンですが、これが光合成で増えるには窒素やリンといった栄養分が必要です。でもそれだけでなく、微量ながら鉄などの金属元素が窒素代謝をはじめとする生物活動において大きな役割を担っています。しかし、デリケートな成分なのでこれまで循環機構が解明されていなかったのです。海水中の鉄の濃度は基本的に低く、鉄不足が生物生産の制限になっている海域は約30%もあります。鉄が枯渇しているエリアに鉄をまくとプランクトンがわっと増えるんです。私の主な研究テーマは鉄などの微量金属元素がどのように海洋で循環しているのかを調べることです。」

とはいえ、船そのものが金属の塊であることから、海水の鉄の調査には大変神経を使うのだそうです。他の成分と混じらないよう特殊な器具を使い、作業の段取りも厳しく決められています。

「長期の調査航海はお金もかかります

海の不思議や未知の領域を化学で探る



港に停泊中の長崎丸のデッキで採水器を扱う先生。このような調査器具の扱い方も実習で学ぶことのひとつです。



1か月以上にもなる航海では、ダイナミックな大自然に感動することもしばしば。クジラが接近し過ぎて調査が継続できず、みんまでしばらくクジラ見物をしていただくこともあったそうです。

プランクトンの生物活動に大きな役割を持つ、鉄など微量栄養素の循環機構を解明しています。

から、他の研究者と共同調査をすることもあります。自分が採ったパラメータだけでは分からないことも、物理や生物など他分野の研究者の気付きがヒントになることもあるのが海洋研究の面白いところです。水産学部では練習船での乗船実習があり、私も同乗して学生の調査や解析を指導しますが、チームの中での協調性は実習で身に付けてほしい大切な資質です。また一度航海に出ると単には戻ってこれませんから、しっかりと道具の準備をすることも必要です。最初はバタバタしていた学生が、半年も過ぎると言われなくてもテキパキ準備をしているのを見ると、ああ、成長しているなとうれしくなります。」

意外なのは海外で出会う研究者の半分は女性だということ。

「日本では少数派だったので励まされました。しかもみんなタフで頼もしい。海洋の環境研究は未知の領域もあります。地球環境の保全を目指す研究者が一人でも多く巣立ってほしいですね。」

水産・環境科学総合研究科 水産科学領域
近藤能子 助教

東京水産大学水産学部卒業。東京大学大学院農学生命科学研究科水圏生物科学専攻博士課程修了。南カリフォルニア大学生物学研究所科学科特任研究員、国立極地研究所特任研究員を経て、2015年より長崎大学へ着任、現職。

講義 海洋生産管理学実習I(水産2年) / 海洋環境科学実習IV(水産3年) / 乗船実習X(水産3年)他

Yoshiko KONDO

PROFESSORS OF
NAGASAKI UNIVERSITY



毎

年七月に行われる長崎大学のオープンキャンパスで人気なのが、薬学部の岸川直哉准教授の実験コーナーです。

「紫外線ランプを使って、身の回りの日用品から出る蛍光を見せます。昼間にトンボはよく見えるけれどトンボは見えないけれどトンボは一匹でもすぐに発見できます。光らせるとトンボは見えないものを見ようとする技術。細胞も光らせることで特定の成分が働いているかが分かります」。

岸川先生の専門は分析化学で、特に蛍光と化学発光を研究しています。ノーベル化学賞を受賞した下村脩博士は、薬学部の前身である長崎医科大学附属薬学専門部の出身ですが、発光研究の第一人者です。

「博士の発見で発光の世界はぐっと広がりました。私が専門としている分析化学は、主に物質の量や種類を調べる方法を開拓する学問分野です。血液中の医薬品の濃度は薬効や副作用に関連します。また、体の中の生体成分の濃度を測ることで病気の予測もできます。分析は化学の基本。まず何が、どこに、どれくらい含まれているかを調べることからすべてが始まります。そのためにより良い分析方法を探るわけですが、濃度が低い物をいかに正確に測定できるか、感度で勝負が決まります」。

発光させて見えないものを見る



先生が用いた試薬の実験写真が、国際的な学術誌の表紙を飾りました。

分析化学は取扱いジャンルが広く、発想の転換で新発見も!

オープンキャンパスで行われる実験。栄養ドリンク、洗剤、紙幣……意外なものに蛍光の仕掛けがあることに、高校生も驚いて興味を持つのだそうです。

特に私が使う蛍光や化学発光の技術は高感度な分析方法として信頼性も高いのです」。

医療以外にも応用できそうですね。「分析する対象は生体だけでなく、大気汚染物質や食品中の成分、中には犯罪捜査に協力して警察といっしょに証拠を分析することもあります。私の研究室出身者の中には、警察の鑑識で活躍する方もいます」。

「それだけに、あるジャンルで失敗した方法が別の場面に応用が利くというケースもあります。例えば最近、光る物質を作ろうと合成した試薬が、人の酸化ストレスの診断に役立つことが分かりました。実験に行き詰まっても一歩引いて冷静に考える習慣を付けていれば、学生だつて新発見も夢じゃありません」。

地道に粘ることが多い理学系の世界で、発想の転換が功を奏す、一風変わった分野。そのためにも、日頃から世の中で何が求められているか、アンテナを張っておくことが大切、と先生は語りました。

医歯薬学総合研究科 生命科学専攻
岸川直哉 准教授

長崎大学薬学部卒業。長崎大学大学院薬学研究科博士前期課程修了。博士(薬学)。2001年より長崎大学に着任。2008年より現職。

講義 薬品分析化学(薬1年)/ピギナーのための物理化学(教養教育)/健康薬科学概論(薬2年)/創薬科学(薬4年)他

Naoya KISHIKAWA

PROFESSORS OF NAGASAKI UNIVERSITY

長

崎大学には九つの学部以外に、学内共同教育研究施設等が十五あり、その一つがダイバーシティ推進センター。子育てや介護などのライフイベントとの両立支援や、教員、職員、学生がより「働きやすい」「学びやすい」環境づくりを目的に、大学内を改革しています。藤井直子助教はここで事業運営の役割を担いながら、キャリア教育などでも講義を担当しています。

「私の専門は労働法です。入学して間もない一年次に、働くことから生じる義務と権利の基礎知識を教えます。労働時間と割増賃金についての決まり事や通勤災害の話などは労働者の権利の部分です。基本的な権利を知らずに苦しむことにならないようサポートします」。

アルバイトや就職活動など、大学生になると急に「働くこと」が身近になりますが、労働者が法律でどのくらい守られているか知らない学生もいますか? 「多いですね。そのほか女性が生涯働き続けるのと結婚などで辞めてパート再就職をするのでは生涯賃金が約二億円違うといった話も、ライフプランを考える際の参考になればと伝えています」。

先生ご自身は、以前は法務省で働いていたと聞きました。

「大学で刑法を学び、法務省や地方検察庁で働いていました。同期の男性はみんな捜査畑で、私も現場でバリバリ学んで働きたかった。でも当時、特に未婚の

「働くこと」の義務と権利を知る



長崎大学には子育てや介護などで研究時間の確保が難しい研究者に対し、大学院生などをテクニカルスタッフとして雇用し、研究継続をサポートする制度があります。藤井先生のテクニカルスタッフは多文化社会学部の篠崎碧さん。英語力を生かし、英国の労働法関連の文献を翻訳し概略をまとめるの手伝っています。



この4月にはダイバーシティ推進センターの下、国の企業主導型保育事業の助成を受けて大学教職員用の「文教おもやい保育園」が開園しました。

私も壁にぶち当たりましたが、悩みや葛藤を経て今があります。



女性は総務や秘書職に就くことが多く、悩みました。結局辞職を選択し、当時の葛藤をバネに、働くことを取り巻く法律をもう一度学び直して私の専門分野にしようと大学院の門を叩き、今があります」。

長崎に職を得てからは、パートナーを横浜に残して二人の子どもさんと共に長崎暮らしなのだそう。 「子連れ単身赴任です。伊東昌子センター長をはじめ周りの方や家族の理解と協力があつて今の生活があります。好きなだけ研究をしていた頃が懐かしい。私にとつての憧れのロールモデルは女性恩師です。日本労働法学会・ジェンダー法学会といった分野で要職を歴任しながら私たちの知的好奇心を刺激してくれました。私も、学生に対して働く社会をより良くする動機づけができた理想です」。

柔らかな語り口の裏には葛藤をキャリアに変えた強靱な意志がありました。

ダイバーシティ推進センター
藤井直子 助教

東京都立大学法学部卒業。東京にて法務省勤務の後、早稲田大学大学院法学研究科博士課程入学。2012年より独立行政法人労働政策研究・研修機構労働使関係部門の臨時研究協力員。2015年長崎大学に着任、現職。2016年より長崎大学地方創生推進本部キャリア支援センター助教業務。

講義 キャリア入門(教養教育)/自分のキャリアを考える講座~男女共同参画とダイバーシティの視点から~(教養教育)

Naoko FUJII

PROFESSORS OF NAGASAKI UNIVERSITY